千葉県市原市島野における伝統的集落の持続性についての研究
-〈千年村〉研究その 3-

正会員　○小林千尋[1]
正会員　　中谷礼仁[2]
正会員　　庄子幸佑[3]
正会員　　堀井隆秀[1]

集落研究　　持続性　　千葉県
微地形　　防災　　小字

1. はじめに

前々稿にて紹介した千年村運動体では、2012 年に千葉県悉皆調査を実施し、古代郷が現在地に比定しうる 103 郷のうち、89 箇所の千年村を実見した。

そのなかでも近代化や市街化を受け入れながら農業などの伝統的な生産活動も維持している千葉県市原市島野（島野地区）を選定し、調査を行なった。

本稿では 2 節において千年村町字の類型化に関する既往研究より島野地区の性質を述べ、3-5 節において『2012 年度 千葉県市原市島野 詳細調査報告書』[1] の執筆にかかわる調査・研究をもとに、島野地区の持続性、その要因として伝統的な集落構造が備え持つ防災性を評価した。

図 1　島野地区航空写真と各地区の位置関係（白線は町字を図示した）

【島野地区の概要】

立地：千葉県中心部に位置する市原市の北西部、千葉県いすみ市大多喜から東京湾へと注ぐ養老川の下流域、その西岸に位置する。/ **地区の構成**：谷島野、七ツ町、金川原、白塚[2]、塚原の 5 地区から構成されている。/ **人口**：世帯数 1,427、人口 3,200 人 (2014 年 3 月)。この 10 年の間に 100 人近くの人口増加が見られる。/ **生業**：多くの田畑が見られるが、産業として地区を支えているわけではなく、会社員などが中心である。

2. 千年村町字の類型化と島野地区の性質

千年村を起源とする千葉県 244 の町字の形態的特性に関して、地形に応じた 4 つの類型に分類することができる (高橋、2014）[3]。4 類型は以下の通りである。（該当数 / 総数）

1) 台地 (丘陵)+ 低地セット型（87/244）
2) 谷戸囲い込み型（57/244）
3) 台地先端型（27/244）
4) 低地のみ型（35/244）

高橋によると、この 4 類型は、自然立地を生かした土地利用がなされていること、また千葉県の限界集落の大字とは領域が重なっていないことなどが指摘され、その理由として農業を行ないうる平地面積の差異などが挙げられた。本稿で扱う島野地区は 4) 低地のみ型 に分類された。低地のみ型は平坦地が多く農業に適した土地利用であるとされ、とくに島野地区は水田率[4] が 58.1％と 244 大字中 30 番目に高く、千年村を起源とする町字のなかでも相対的に生産性の高い地域だといえる。

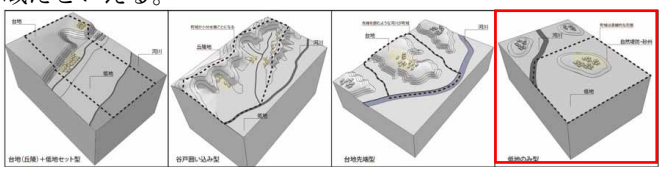

図 2　町字形態類型（高橋、2014）
左から台地（丘陵）＋低地セット型、谷戸囲い込み型、台地先端型、低地のみ型。島野地区が分類される低地のみ型を赤枠で示した。

3. 島野地区の歴史的性格

・古代の島野

島野地区は『角川日本地名大辞典 12. 千葉』「地名編」において、「〔古代〕島穴郷 : 養老川下流西岸、現在の市原市島野に比定される (地名辞書・地理志料) 」[5] とあり、古代の海上郡島穴郷との比定がなされている。また、古代交通に関する研究者、前之園亮一氏は式内社である嶋穴神社の立地から、古代の島穴郷が現在の島野地区に比定できるとしている[6]。これらの先行研究から、島野地区には古代において社会的集団が存在していたことが推定された。なお、発掘調査は行なわれていない。

・中世以降の島野

『和名類聚抄』以降、「島野」(「嶋穴」「島穴」など類似表記も含む) を確認できる文献を、『日本歴史地名体系巻 12 千葉県の地名』[7] がまとめている。その冒頭に掲げられているのは、『応安五年 (一三七二) 市原八幡宮五月会馬野郡四村配分帳』(覚通寺文書) である。そこに島穴郷と見え、その後も近世まで定期的に「島野」(「嶋穴」「島穴」) を確認することができる。

これらの文献資料より、島野地区に存在していた社会的集団は、古代から途絶えることなく現在まで存続してきたのではないかと推測された。

・養老川の流路変遷

島野地区の近くを流れる養老川は古代からその流路が定まらず、島野地区にも大きな影響を与えていた。そこで既往研究[8] を元にその変遷を重ね合わせた結果、七ツ町・金川原の 2 つの地区は、その流路に一度も重なっていないことが分かった。

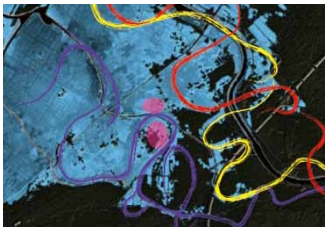

図 3　古代養老川の流路変遷図（赤が縄文海進後の流路、紫が江戸時代以前の流路、黄色が江戸時代の流路、ピンク色が七ツ町、金川原地区）

A study on the sustainability of the traditional settlement in Shimano, Ichihara City, Chiba Prefecture - Millennium villages research Part3-

KOBAYASHI Chihiro,NAKATANI Norihito,
SHOJI Kosuke, HORII Takahide

4. 島野地区における持続の要因

島野地区を構成する五地区のなかでも、古養老川の流路と一度も重なっていない七ツ町・金川原を対象とし、これらの集落が古代から現在にいたるまで続いてきた要因を分析した。

・微地形に従った屋敷構え

七ツ町・金川原の居住環境の標高を測定した結果、両集落は標高3.5mから4.5mの自然堤防上に立地していた。周辺の水田との高低差は明瞭であり、低地は水田、微高地は居住部といった微地形に応じた土地利用が行われていることがうかがわれた。

図４　七ツ町と金川原の微地形図（0.5m コンター）

とくに金川原地区では、円弧上の地形に対して短冊状に各屋敷の敷地が規定され、敷地内は順に「道 | 前庭 | 母屋 | 裏庭(畑)| 屋敷林」という構成がみられた。また、金川原・七ツ町両地区において、水田と屋敷林の境部分に人為的な土盛りをしている例がみられた。

これら土盛りや裏庭、屋敷林は、標高の低い水田との緩衝帯として機能していると推測された。つまり、家屋と水田の境部分に対して人為的に大地を成形し、その土地の性質を読み解ったうえで屋敷構えが決定されていると考えられた。

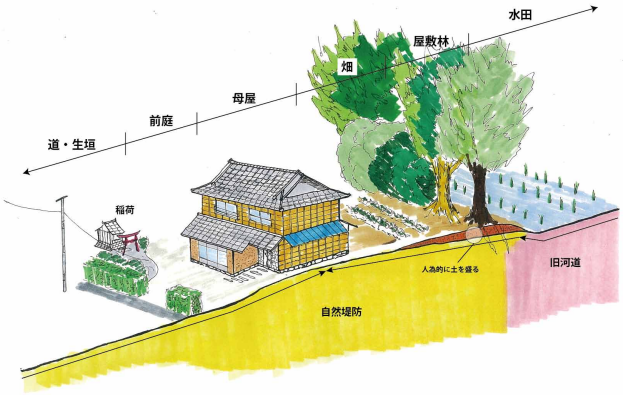

図５　金川原地区における微地形に即した屋敷構えダイアグラム

・土地利用と小字名の関係

島野地区の小字界および小字名[9]と土地利用の関係を比較した。その結果、古養老川の流路であった土地に「捨尻」「堀込」などの水害に関連した小字がつけられ、小字名が土地の生産性や危険性と関連して名付けられていることが分かった。歴史的に高潮や河川の氾濫など水害被害を受けてきた島野地区において、地質・地形にあわせた小字を定めることで、共同体として土地の性質を認識し、住まう範囲を限定してきた可能性が指摘できた。

語	意味
なわ	「たわんだ地形をいうか」。
向	「崩壊地名」を示すか。
すて	「崩れ地」などをいうものか。
じり	「水気の多い場所」を示すか。
五大	ゴタの転称称。湿地などの意。
込	「水のあふれやすい所」の意。
茶	「崩壊地形」「浸食地形」

図６　小字界と航空写真の重ね合わせ（左）、金川原地区の小字の意味（右）

以上をふまえ、微地形に従った屋敷構えや小字名との関係といった水害のリスクを減らす土地利用を、島野地区の集落構造が備え持つ防災性として評価することができた。

5. まとめ

本稿の前半では、千年村大字における地形分類から島野地区が自然堤防上に居住地を構える「低地のみ型」に分類され、相対的に生産性の高い地域であることを示した。

後半部では、実地調査をもと、島野地区のなかでも七ツ町・金川原地区において微地形に応じた伝統的な土地利用が災害リスクを減じていることを指摘し、結論として島野地区の持続性、その要因としての防災性を評価した。

一方で、生業や祭事、コミュニティといった共同体に関する分析を行なうことはできなかった。これらは集落の持続性にも大きく関係するものと考えられ、今後の課題として挙げられた。

現在、当地区周辺には、都市計画道路(青柳海保線・市原縦幹線・八幡椎津線)が計画されており、今後大きな変容を迎える可能性のある地域ということがいえる。この都市計画道路は島野地区の景観を十分に読み込んだものとはいえず、今後、地域が主体となった村づくりを行なっていくうえでも、本研究のような環境・集落・共同体が一体となって意味をもつ地域アセスメントは重要であると考えられる。

謝辞

本報告の元になった島野地区の調査(2012/11/17-18 実施)では、七ツ町・金川原両地区の方々に大変ご協力いただいた。記して謝意とする。

図版出典

図 1. 筆者作成　**図 2.** 高橋大樹『千年村を起源とする町字の地形立地とその形態的特性について』(千葉大学大学院園芸学研究科修士論文、2014 年、p.54)
図 3. 図 4. 高橋大樹作成　**図 5.** 庄子幸佑作成　**図 6.** 堀井隆秀作成。小字名の意味については『地名用語語源辞典』(東京堂出版、1983)を参照。

脚註

1. 千年村運動体の早稲田大学建築学科中谷礼仁研究室、千葉大学大学院園芸学研究科木下剛研究室が合同で作成。　**2.** 白塚は現在の大字域に含まれないが、住民の方への聞き取りの中でこの地区構成であると伺った。　**3.** 高橋大樹『千年村を起源とする町字の地形立地とその形態的特性について』(千葉大学大学院園芸学研究科修士論文、2014 年)　**4.** 農林水産省が定義する『農業地域 類型別基準指標』に基づく　**5.**『角川日本地名大辞典 12. 千葉』(角川書店、1984 年、p436)　**6.** 前之園亮一「上総国嶋穴駅周辺の古代水陸交通路」一嶋穴郷と海上潟、市原市文化財研究会『市原市文化財研究会紀要第一輯古代上総国の嶋穴駅と官道』(市原市文化財研究会事務局、1994、p20)では、「嶋穴郷は、千葉県市原市島野に鎮座する式内社嶋穴神社周辺の地域に比定できる。本来嶋穴神社は、現社地の北およそ百メートルのところにあったらしいが、わずかな距離の移動にすぎないので、嶋穴郷を当社周辺の地域に求めても全く支障はない」としている。　**7.**『日本歴史地名大系第一二巻 千葉県の地名』(平凡社、1996)　**8.** 樋口義幸「養老川の下流域に於ける流路の変遷」(『上総市原』no.2、1978/03、p12-22)　**9.** 小字名および小字界については、市原市島野地区条理地割復原図(島野地区小字図・原図提供＝石原義雄、作図　谷島一馬、トレース　須藤美智子)を参照した。

1 早稲田大学大学院創造理工学研究科建築学専攻 修士課程
2 早稲田大学創造理工学部建築学科 教授・博士(工学)
3 香川県総務部営繕課 技師

1 Graduate student, School of Science and Engineering, Waseda Univ.
2 Prof,School of Creative Science and Engineering, Waseda Univ.,Dr Eng
3 Engineer, Building and Repairs division, Kagawa Prefecture.